事例で深める！

学習評価

実践校の取り組みを基に、
学習評価をより充実させるポイントを
田村先生がアドバイス

静岡県立静岡東高校

評定への総括の過程で、授業や評価方法の改善点に気づく仕組みを構築

解説者

文部科学省 初等中等教育局
主任視学官
田村 学 たむら・まなぶ
専門は教科教育学、教育方法学、カリキュラム論。文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、同省同局視学官、國學院大學教授などを経て、現職。著書に、『学習評価』（東洋館出版社）など多数。

前年度の学習評価を振り返り、全校で議論して改善

田村 貴校では今年度、観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）の結果を評定に総括する方法を変更したそうですね。

中上 本校は2022年度に、各観点の評価結果であるA、B、Cの組み合わせから評定に総括する方法を採用し、A、B、Cの全27通りの組み合わせと、それぞれに対応する5段階の評定を示した表を作成しました（＊）。そして22年度末に当年度の学習評価を振り返ったところ、「主体的に学習に取り組む態度」は、知識・技能を獲得したり、思考力・判断力・表現力等を身につけたりすることに向けた取り組みの中で評価されるものですから、そもそも「CCA」といった起こりにくい組み合わせは、評定に総括する表には掲載しなくてもよいのではないかという意見が上がりました。

戸田 そこで、教務課で他校の様々な実践を研究し、職員会議等で議論した結果、起こりにくいと考えられるものを除いたA、B、Cの組み合わせは13通りとなり、それぞれに対応する5段階の評定を示すことにしました（**P.37図上部**）。

田村 先生方が試行錯誤を重ねて納得する方法をつくり上げたのは素晴らしいですね。今年度、新たな方法を運用する中で、A、B、Cの組み合わせが13通り以外になった場合はどうしていますか。

梶山 その場合は、「主体的に学習に取り組む態度」の評価が適切なのかを科目担当者間で再確認し、場合によっては評価結果を見直すことにしています。加えて、生徒の資質・能力を育成する授業になっているか、生徒の資質・能力を適切に見取れているかなど、指導と評価を見直すことにつなげています。

観点別評価を実施するようになってから、資質・能力の育成を

静岡県立静岡東高校プロフィール

設立 1963（昭和38）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1学年約280人
2023年度卒業生進路実績 国公立大は、東北大、筑波大、横浜国立大、静岡大、名古屋大、大阪大などに156人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ610人が合格。

左から／中上明仁（教務主任、理科［化学］）、梶山奈津子（地理歴史・公民科［地理］、教務課）、戸田圭亮（国語科、教務課）

＊ 同校の学習評価に関する取り組みは、本誌2022年度2月号の特集で紹介しています。ウェブサイト『VIEW next ONLINE』の「高校版バックナンバー」（https://view-next.benesse.jp/view/bkn-hs/article14278/）、または右の2次元コードからアクセスしてください。

より意識して生徒同士の対話やレポート、振り返りを取り入れるなど、授業は大きく変わってきています。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法を本格的に見直す

中上　A、B、Cの組み合わせを13通りのみ示すことにしたのは、それ以外の組み合わせとなった時に、教師が評価結果を見直す中で、自分の授業や評価方法において改善すべき点に気づき、実際に改善するきっかけになるのではないかという意図がありました（**図下部**）。

田村　その意図が先生方に伝わり、授業や評価方法の改善につながっている点はとてもよいですね。次の段階としては、「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法を本格的に見直してみましょう。

戸田　「思考・判断・表現」は、定期考査や課題などにおける記述内容から評価していますが、「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法はまだ模索中です。

田村　科目や単元、学習活動において、生徒が主体性を発揮する姿を具体的に言語化した評価規準を作成し、それを基に評価しましょう。ただ、そうした方法に対して、「評価に教師の主観が入り、客観性に欠ける。結果が数値化される定期考査のようなペーパーテストを中心に評価すべきだ」といった意見をよく聞きます。果たして数値化されれば客観的と言えるのでしょうか。ペーパーテストにも作問者の主観が入っており、必ずしも客観的とは言えません。

中上　実は評定への総括を見直すため、自分の担当科目の評価プロセスを振り返ったところ、当初立てた目標が生徒の実態と合っているかを常に確認する必要があると感じました。授業改善に向けて、各教科・科目で指導すべき内容のまとまりごとの評価規準を見直し、それに基づいた単元の指導計画の改善について話し合う必要性を強く感じています。

田村　重要なのは、複数の主観を照らし合わせて評価の客観性や信頼性を高めることであり、そのために教師間で話し合って評価規準を作成することです。

中上　本校の教師は、毎年評価結果を振り返り、評価方法を改善していくことを共通認識としています。本日の対話を踏まえて早速、校内で評価規準の作成について議論したいと思います。

図　2024年度以降の観点別学習状況の評価について

■評定への総括の方法

観点別学習状況の評価の各観点の評価結果を、A、B、Cの組み合わせに基づいて評定に総括する。A、B、Cの組み合わせと評定の対応表には13通りを掲載。

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	評定
A	A	A	5
A	B	A	5
B	A	A	5
A	B	B	4
B	A	B	4
B	B	B	3
A	C	B	3
B	C	B	3
C	B	B	3
B	C	C	2
C	B	C	2
C	C	B	2
C	C	C	1

■13通りの組み合わせのみを掲載した考え方

「主体的に学習に取り組む態度」は、知識・技能を獲得したり、思考力・判断力・表現力等を身につけたりすることに向けた取り組みの中で評価されるものである。そこで、そもそも「CCA」といった起こりにくい組み合わせを評定に総括する表から除いたところ、13通りとなった。

■評価結果を踏まえた改善の方向性

- A、B、Cの組み合わせが13通り以外になった場合は、その評価が適切なのかを科目担当者間で再確認する。
- 例えば、「AAC」「CCA」となった場合、「主体的に学習に取り組む態度」の評価が、授業中の挙手の回数や毎時間ノートを取っているかなど、生徒の性格や行動面の傾向が一時的に表出された場面を捉えた評価になっていないかを確認する必要がある。

※学校資料を基に編集部で作成。